

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

新訂 萬葉集

三

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

新訂
萬
葉
集
三

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

佐伯梅友（さへきうめとも）

明治三十二年埼玉縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京教育大學名譽教授、大東文化大學名譽教授。主著―萬葉語研究、源氏物語新抄、古今和歌集等。

藤森朋夫（ふちもりともを）

明治三十一年長野縣生。昭和四十四年歿。昭和四年東北大學國文學科卒業。東京女子大學教授を経て大東文化大學教授。主著―堤中納言物語新釋、萬葉集研究書誌、近代秀歌等。

石井庄司（いしむしやうじ）

明治三十三年奈良縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京教育大學教授を経て東海大學教授。主著―國文學と國語教育、古典考究（記紀・萬葉）等。

日本古典全書

「訂 萬葉集」 三

佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司校註

昭和二十七年二月二十九日初版發行

昭和四十九年四月二十日新訂初版發行

昭和五十四年五月三十日第三刷發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九州

市小倉北區砂津・名古屋市中區榮）

定價 一二〇〇圓

目次

本文

〔訓〕

卷第十……………	三
----------	---

春雑歌……………	三
----------	---

一八三 雑歌七首

一八九 鳥を詠める十三首

一八三 雪を詠める十一首

一四三 霞を詠める三首

一四四 柳を詠める八首

一四四 花を詠める二十首

一八四 月を詠める三首

目次

〔原文〕

卷第十……………	二三
----------	----

春雑歌……………	二三
----------	----

一八三 雑歌七首

一八九 詠鳥十三首

一八三 詠雪十一首

一四三 詠霞三首

一四四 詠柳八首

一四四 詠花二十首

一八四 詠月三首

一八七 雨を詠める一首

一八七 詠雨一首

一八七 河を詠める一首

一八七 詠河一首

一八七 煙を詠める一首

一八七 詠煙一首

一八〇 野遊四首

一八〇 野遊四首

一八四 舊りにしを歎く二首

一八四 歎舊二首

一八六 會へるをよろこ權ぶる一首

一八六 權逢一首

一八七 旋頭歌二首

一八七 旋頭歌二首

一八九 譬喩歌一首

一八九 譬喩歌一首

春相聞……………一〇

春相聞……………三九

一八九 相聞七首

一八九 相聞七首

一八九 鳥に寄する二首

一八九 寄鳥二首

一八九 花に寄する九首

一八九 寄花九首

一九〇 霜に寄する一首

一九〇 寄霜一首

一九〇 霞に寄する六首

一九〇 寄霞六首

一九五 雨に寄する四首

一九五 寄雨四首

- 一九九 草に寄する三首
 一九三 松に寄する一首
 一九三 雲に寄する一首
 一九四 蘘かづらを贈る一首
 一九五 別わかれを悲しぶる一首
 一九六 問答十一首

夏雜歌

- 一九七 鳥を詠める二十七首
 一九四 蟬ひぐらしを詠める一首
 一九五 榛はりを詠める一首
 一九六 花を詠める十首
 一九六 問答二首
 一九六 譬喩歌一首

夏相聞

- 一九九 鳥に寄する三首

- 一九九 寄草三首
 一九三 寄松一首
 一九三 寄雲一首
 一九四 贈蘘かづら一首
 一九五 悲別一首
 一九六 問答十一首

夏雜歌

- 一九七 詠鳥二十七首
 一九四 詠蟬一首
 一九五 詠榛一首
 一九六 詠花十首
 一九六 問答二首
 一九六 譬喩歌一首

夏相聞

- 一九九 寄鳥三首

一九二 蟬ひぐらしに寄する一首

一九二 寄蟬一首

一九三 草に寄する四首

一九三 寄草四首

一九七 花に寄する七首

一九七 寄花七首

一九四 露に寄する一首

一九四 寄露一首

一九五 日に寄する一首

一九五 寄日一首

秋雑歌……………一九

秋雑歌……………一九

一九六 七夕たなばた九十八首

一九六 七夕九十八首

二〇四 花を詠める三十四首

二〇四 詠花三十四首

二三六 雁かりを詠める十三首

二三六 詠鴈十三首

三四一 鹿鳴しかを詠める十六首

三四一 詠鹿鳴十六首

三三〇 蟬ひぐらしを詠める一首

三三〇 詠蟬一首

三三九 蟋蟀こほろぎを詠める三首

三三九 詠蟋蟀三首

三三六 蝦かはづを詠める五首

三三六 詠蝦五首

三三六 鳥を詠める二首

三三六 詠鳥二首

三三六 露を詠める九首

三三六 詠露九首

二三七 山を詠める一首

二三八 黄葉もみぢを詠める四十一首

二三九 水田みなたを詠める三首

二三三 河を詠める一首

二三三 月を詠める七首

二三〇 風を詠める三首

二三三 芳を詠める一首

二三四 雨を詠める四首

二三六 霜を詠める一首

秋相聞……………三

二三九 相聞五首

二三四 水田みなたに寄する八首

二三五 露に寄する八首

二三〇 風に寄する二首

二三二 雨に寄する二首

二三七 詠山一首

二三八 詠黄葉四十一首

二三九 詠水田三首

二三三 詠河一首

二三三 詠月七首

二三〇 詠風三首

二三三 詠芳一首

二三四 詠雨四首

二三六 詠霜一首

秋相聞……………二五

二三九 相聞五首

二三四 寄水田八首

二三五 寄露八首

二三〇 寄風二首

二三二 寄雨二首

二三四	蟋 こほろぎ に寄する一首	二四四	寄蟋一首
二三五	蝦 かはづ に寄する一首	二四五	寄蝦一首
二五六	雁 かり に寄する一首	二六六	寄鴈一首
二六七	鹿に寄する二首	二六七	寄鹿二首
二六九	鶴に寄する一首	二六九	寄鶴一首
二七〇	草に寄する一首	二七〇	寄草一首
二七一	花に寄する二十三首	二七一	寄花二十三首
二五四	山に寄する一首	二五四	寄山一首
二五五	黄葉 もみぢ に寄する三首	二五五	寄黄葉三首
二五八	月に寄する三首	二五八	寄月三首
二五九	夜に寄する三首	二五九	寄夜三首
二六〇	衣に寄する一首	二六〇	寄衣一首
二六五	問答四首	二六五	問答四首
二六九	譬喩歌一首	二六九	譬喩歌一首
二七〇	旋頭歌二首	二七〇	旋頭歌二首

冬雜歌……………

四五

冬雜歌……………

一六四

二三二 雜歌四首

二三二 雜歌四首

二三六 雪を詠める九首

二三六 詠雪九首

二三五 花を詠める五首

二三五 詠花五首

二三〇 露を詠める一首

二三〇 詠露一首

二三二 黄葉もみぢを詠める一首

二三二 詠黄葉一首

二三二 月を詠める一首

二三二 詠月一首

冬相聞……………

四七

冬相聞……………

一六六

二三三 相聞二首

二三三 相聞二首

二三五 露に寄する一首

二三五 寄露一首

二三六 霜に寄する一首

二三六 寄霜一首

二三七 雪に寄する十二首

二三七 寄雪十二首

二三九 花に寄する一首

二三九 寄花一首

二三〇 夜に寄する一首

二三〇 寄夜一首

卷第十一……………五

古今の相聞往來の歌の類の上……………五

一三五 旋頭歌十七首

一三六 正に心緒を述ぶる歌百四十九首

一三七 物に寄せて思を陳ぶる歌二百八十二首

一三八 問答の歌二十九首

一三九 譬喩歌十三首

卷第十二……………九

古今相聞往來の歌の類の下……………九

一四〇 正に心緒を述ぶる歌一百十首

一四一 物に寄せて思を陳ぶる歌一百五十首

一四二 問答の歌三十六首

一四三 羈旅にて思を發せる歌五十三首

一四四 別を悲しぶる歌三十一首

卷第十一……………一六

古今相聞往來歌類之上……………一六

一三五 旋頭歌十七首

一三六 正述心緒歌百四十九首

一三七 寄物陳思歌二百八十二首

一三八 問答歌二十九首

一三九 譬喩歌十三首

卷第十二……………一七

古今相聞往來歌類之下……………一七

一四〇 正述心緒歌一百十首

一四一 寄物陳思歌一百五十首

一四二 問答歌三十六首

一四三 羈旅發思歌五十三首

一四四 悲別歌三十一首

凡 例

一、本書の書き下し本文は、終りに添へた原文の訓をかな交りに書いたものである。それはなるべく読みやすいやうにと考へて、必ずしも原文の用字を保存しようとはしなかつた。

一、訓は出来るだけ諸説をみてそのよいと思ふものによつたが、そのよるところは一々ことわらない。ときに編者の私按も交へた。しかもなほ訓みかねたものもあり、あきたらぬものもあつて、將來の研鑽にまつべきものの多いことはいふまでもない。

一、頭註は紙面の關係で出来るだけ簡明にと心がけたが、そのため解しにくいこともあるであらう。御判讀を乞ふ次第である。これもみな諸家の研究に負ふものであるが一々ことわらない。紙面活用のため歌番號をあげて参照を乞うところも多い。(↓の符號を参照の語に代へた。)それは、その語句がその番號の歌にもあることを示したり、解釋の傍例たるものを示したり、類歌などを示したり、作者の傳記などについて参考となることを示したり、いろいろであつて、参照の番號だけあげたものでも、必ずしもその箇處に頭註があることを意味しない。

一、原文は寛永版本を底本とし、校本萬葉集・新校萬葉集・定本萬葉集等によつて校訂を加へた。その體

裁は白文萬葉集や新校萬葉集に則つた。

一、底本の文字を改めた場合は、頭註にその由をことわつた。それはまづその部分の文字を出し、つぎに（一）のうちに訂正のよりどころを略號で示し、つぎに「」の中に底本の字面をあげるといふやうにした。「」は底本に文字のないことを示すものである。

一、底本の異體字はおほむね普通字に改めたが、これは一々ことわらない。例へば、つぎのやうなものである。

普通字	異體字	普通字	異體字	普通字	異體字	普通字	異體字
片	斤	垂	垂	聞	聾	杉	杻
印	印	廻	迴	須	湏	恩	恩
咲	咲	美	羨	率	辮	岡	岡
沈	沉	熟	熟	等	等	崗	崗
奈	奈	紐	紉	答	荅	敝	敝

一、首を首、茅を茅、沾を沾、頃を頃、卿を卿、郷を郷、沫を沫、齊を齊と誤つてゐる類の、明らかに底本の誤りと知られるものは、これを改めて一々ことわらない。鐘礼を鍾礼とし、塩を鹽とする。また底本に大字であるものを小字として、改行せられてゐないところを改行し、改行せられてゐるところを續

けた類も、一々これを註しない。

一、原文の上の註には、底本の文字は改めないが古寫本における異同の参考すべきものをも、ときにこれをあげた。また、左右をまで、義之をてしとよむなど、注意をひくよみ方もこれを註した。

二、萬葉集總索引などの使用に便利をはかつて、原文には、國歌大觀の番號の外に寛永版本の丁數をも附した。下方平字の數字がその丁の表で、その次のウがその裏であり、その丁の表または裏の最初の文字のある行の眞下においてある。本文においては、左下に「を附した文字が、その表または裏の最後の文字である。

一、目錄は底本には卷毎にそのはじめにあるのであるが、いまは便宜一括して最初におき、書き下しを上、原文を下に、相對せしめた。そこにも國歌大觀の番號を附けて、本書の頁數に代へた。歌が數首にわたるものは、その最初の番號を附けた。目錄は、本文とは別でその間多少の異同はあるが、註記を省いた。

一、本書に用ゐた略號は、校本萬葉集以來諸書に用ゐられてゐるものに從つた。

桂 桂本

藍 藍紙本

元 元曆校本

金 金澤本

天 天治本

尼 尼崎本

嘉 嘉曆傳承本

類 類聚古集

古葉 古葉略類聚鈔

紀	紀州本(神田本)	西	西本願寺本	文	金澤文庫本
細	細井本	矢	大矢本	京	京都大學本
溫	溫故堂本	仙	仙覺抄	拾	萬葉拾穗抄
代	萬葉代匠記	童	萬葉集童蒙抄	考	萬葉考
玉	萬葉集玉の小琴	略解	萬葉集略解	檜	萬葉集檜婦手
古義	萬葉集古義	文字辨證	萬葉集文字辨證	新考	萬葉集新考
新訓	新訓萬葉集	白文	白文萬葉集	定本	定本萬葉集
新校	新校萬葉集	注釋	萬葉集注釋(澤瀉久孝)	全註釋	萬葉集全註釋(武田祐吉)
稿本	萬葉集(塙書房)	意改	編者の意をもつて改めたもの		

校訂のよりどころとしての古本は唯一つをあげるに止めたが、これがさらに校本萬葉集などについて調べる手がかりともなるならばと思ふのである。

一、本書は、佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司の三人の共同責任である。

今回の改訂は、佐伯梅友・石井庄司の二人が當たつた。なほ渡瀬昌忠君の助力を得たところが多い。記して感謝の意を表したい。また、改訂に際し、第五冊目巻末に、萬葉集文化史略年表・作者別索引・初句索引を付載した。

新訂

萬

葉

集

三

石 藤 佐

井 森 伯

庄 朋 梅

司 夫 友

